ドイツ・バイエルン州の「子どもネットワーク」の試みについて

小宮山　潔子

一、ドイツの保育制度

ドイツの保育制度を見ると、保育所（Kinderkrippe）、幼稚園（Kindergarten）、学童保育所（Kinderhort）が三本柱である。保育所は「三歳未満児保育所」と訳されることもある。保育所に入るのは三歳未満児だということをあらわすためである。三歳以上の子供が入る保育所はドイツには存在しないのである。

ドイツの保育所と幼稚園は最初から年齢別の保育施設としてスタートした。三歳未満児の通う所が保育所、三～六歳児は幼稚園、小学校入学後の六歳から十二歳くらいまでの子どもが放課後通うためにあるのが学童保育所である。

保育所と幼稚園が並存していて、いわゆる幼保二元化がよく問題になる日本と比較すると、はじめから幼保一元化がなされていることはドイツの保育制度の大きな特徴と言えよう。管轄省も、連邦家庭・高齢者・女性・青少年省（Bundesministerium für Familie, Senioren, Frauen und Jugend, 日本の厚生省にあたる）に一本化されている。もっとも、世界を眺めてみると、二元化されている日本のような制度のほうが少数派であり、保育制度が一元化されている国が多数である。

ところで、すべての親や子どもの求める保育への要求が、前述の三種の保育施設によって完全に満たされるというわけにはいかない。保育は個別の状況に沿って対応せざるを得ない部分のある事柄であり、よって、ドイツにおいても多様な保育施設が結果として存在している。

たとえば、この三種の施設（時にはそのうちの二種の施設）を一箇所に合体して作られた施設がある。児童通所施設とか、乳幼児・児童保育センターとか呼ばれ、通称KITA（Kindertägesstätte）と称されているものである。

また、幼少連携を前面に出した、就学前クラス（Vorklasse）とか、入学準備課程（Eingangsstufe）といっ

た、五～六歳児対象の施設もある。学校幼稚園(Schulkindergarten)も長い歴史があり、これは、小学校に入学する年齢に達していても就学に必要な発達的要件をまだ満たしていないとされる子どもが通う施設である。

また、特に幼い子どもは施設よりも家庭で保育されるほうが好ましいという考え方も根強くあり、家庭託児保育(Familientagespflege)の制度がその需要に応えている。日本における保育ママによる保育と類似した制度である。

そのほか、親たちが協力してイニシアティブをとって作る保育グループもさかんである。このような両親主導保育グループが生まれる背景には、保育施設が不足しているというだけではなく、親たちの望む保育を実現させようという動機や、親同士の交流の場を求めるという動機も存在している。このような動きは比較的大都市に多くみられ、ベルリンでは1994年で約460のグループが担当省に登録されていた。登録されると青少年福祉協会などから財政的支援を受けられるシステムがある。

このように多様な就学前児童通所施設や保育の制度が存在している中で、ここでは、最近バイエルン州で始まって成果をあげてきている一つの新しい試みについて紹介したい。

二、「子どもネットワーク」の位置付け

それは「子どもネットワーク」(Netz für Kinder)と名付けられた試みである。(注3)

バイエルン州において1993年に誕生し、多様な保育システムの中で、しっかりとした足場を築いてきた実践である。

ドイツでは保育制度に関しても地方分権が徹底しており、「子どもネットワーク」もバイエルン州が独自に始めたシステムである。

そもそも、多くの保育システムがすでに存在し、それぞれに機能している中で、新たに「子どもネットワーク」というシステムが始まったことには理由があるはずである。ミュンヘンのバイエルン州労働・社会秩序・家庭・女性・健康省(Bayerisches Staatsministerium für Arbeit und Sozialordnung, Familie, Frauen und Gesundheit)の、インゲボルグ・ベッカー＝テクスター幼児教育・児童福祉担当官が、当方の問い合わせに対する親切な返書の中で述べていることによれば、それは、〝変化してきている家庭や子どもの現実を十分に考慮すれば、このような保育形態が登場する必要があった〟ということになろう。

現代の先進諸国における子どもを取り巻く状況には似通ったところがある。近代化した社会においては、生活における機械化や情報化が高度に進み、女性の社会進出は増加し、核家族化・晩婚化・少子化が顕著になる。経済的に豊かになり、衣食住の心配が少なくなった社会の中で、人々の欲求は、ある部分ではより高度なものを求める方向へと向かい、ある部分では手ごたえのない不安の中をさまよう

ということも起こる。そこにおいて子どもは、物質的には豊かであるが、きょうだいは少なく、人間関係を学ぶ機会は減少し、大人の管理が強まり、地域社会とのかかわりは弱まるという境遇に置かれやすい。これはドイツも、そして日本も図式的には似た状況といえる。

時代や社会が変化していけば、保育のシステムもそれに伴って変わらざるを得ないと思われるのだが、日本の状況を振り返ってみると、将来を見据えた抜本的な改革というようなものはなかなか見えてこない。将来がどのようなものになるのかは誰にもわからないという宿命はあるが、しかし、改革は既存の制度の部分的手直しにとどまっているというのが現状であろう。これは保育の分野に限らず、日本のさまざまな分野に共通する現象であるかもしれない。

このような社会情勢の中で、バイエルン州は「子どもネットワーク」を立ち上げた。

「子どもネットワーク」というグループ保育を特徴付ける指標として、次の三点を挙げることができよう。それは、

(1) 12～15人の小さなクラスでの保育
(2) 2～12歳の年齢混合クラスでの保育
(3) 運営や保育への両親の参加

である。

行政の定めるクラス定員が大きすぎて、多数の子どもたちに対して一人の保育者では目が行き届かないということがあるとすれば、少人数のクラスを設定することでその問題を解決しよう、というのが、(1) の小さなクラスにするという指標である。そして、あまり少なすぎても、集団保育で学ぶべきものが身につかないおそれもあるということから導き出されたのが、12～15人という人数である。

子どもの数が減り、きょうだい体験も乏しくなっているのならば、保育施設で年齢混合の形式をとってさまざまな子どもたちの間で社会的な学習を可能にしよう、と考えたのが、(2) の年齢混合クラスの考え方である。

核家族化などによって家庭の教育力が低下してきているのならば、また、両親と保育者との間で意見の食い違いが生ずることがあるのならば[注2]、保育システムの運営や保育の実践に両親が参加するのがよい、というのが (3) の両親参加の考え方である。

つまり、「子どもネットワーク」は、現代社会が生み出してきた子どもを取り巻く新しい状況に対応し、また、既存の諸保育施設が抱える問題を解決の方向に導くために生まれた、新しいグループ保育の枠組みということができる。

バイエルン州としては、出発点として、現代社会の状況をどのように捉えているのかを、州の報告の中に見てみよう[注3]。

それによると、私たちの社会空間、生活条件は急速かつ深刻な変動にみまわれており、その本質的特徴としては、

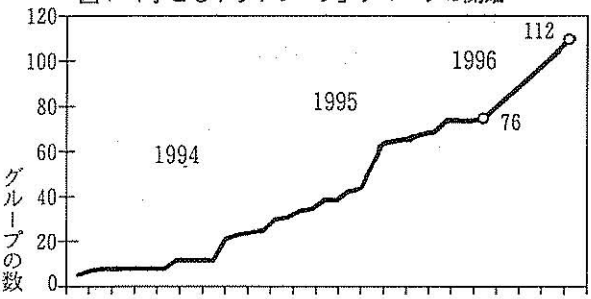
(1) 生活態度の個別化
(2) 生活状態や生活様式の多様化

（3）価値観の変化
（4）メディアの影響力の強まり
（5）経済や労働市場の構造的変化

などがあげられるとしている。

これらは現代日本の状況に対しても当てはまることと思える。子どもたちに何らの痕跡も残さずに通り過ぎる社会的変化というものはありえまい。ここにあげられた現代社会の本質的特徴も、すべての子どもたちに何らかの影響を与えているであろう。きょうだいのいない子どもや、一人親に育てられる子どもは増え続ける。彼らは住居のまわりでも近所の子どもたちに出会うことも少ない。親の高学歴化が進むことと、質の高い保育施設が要求されることとは同時進行であるとも言われる。その保育施設という場は、子どもが新しい出会いを得、さまざまな子どもと体験を共有できる場であるわけだが、それは同時に、両親にとっても同様な新しい出会いの場なのである。

図1 「子どもネットワーク」グループの開始



バイエルン州政府は、児童通所施設について、それは子どもにとって重要な社会的学習の場ととらえる方針を基本としている。またそれは、家庭と就業とが調和するために貢献し、子どもの人生経験上当然必要な場所と考えている。

幼保一元化がなされているということは、子どもの養護、保育、教育を統一して考えることができるということであり、そのような総合的な観点から、需要に応じた保育施設を検討することが可能である。日本のように保育と幼児教育という言葉の使い分けに神経を使うような既存の管轄権の二局化が存在しないだけ、子供時代を総合してとらえられる自由さが感じられる。

「子どもネットワーク」は従来の各種の保育施設と並存する施設である。つまり、両親は「子どもネットワーク」を含めた各種の保育施設の中から、我が子を託す施設を選択する。1993年発足の「子どもネットワーク」はまだその数は多くない。開始後5年を経た1997年現在で112のグループが生まれており、1998年には150となった。図1にその関係をグラフで示す[注4]。

地域的な分布を図2に示す[注5]。

地域的な主力はオーバーバイエルンとミッテルフランケンである。人口の多い、大きな町ほど広まり、小さな町ではあまり普及していないという結果である。両親や保育士の満足度も1万人以上の住民のいる町で明らかに高い。

しかしながら、「子どもネットワーク」は、伝統的な保育施設と競っているのではなく、家庭に似た保育の形式を重視することによって、施設保育を家庭や地域の日常的な生活状況と結びつけようとしているのであり、そのことによっても、急速に賛同者を増している。

両親にとって、提供される保育形式の多様性が保証されていることは、子どものための保育施設選択の際に大変好ましい状況であり、それは、家庭の求めるものとより密接にかみ合った保育システムを選択できる可能性が大きくなるということでもある。年齢混合クラスや保育への両親参加は、古典的な保育の形式の中では、これまで、単に兆しが見えるとしか把握されていなかったものであるが、ここでは目的をもったテーマとして主張されている。その成功は既存の各施設にも影響を与え、導入を現実に検討する施設も出始めている。

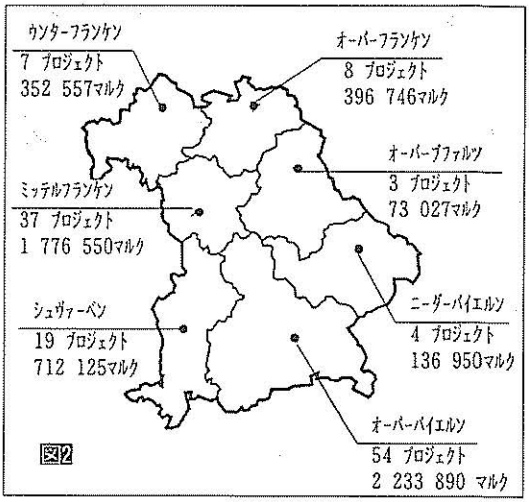


図2

保育施設というものは、子どもをよりよく育てるという目的や、実際に子どもを保育している現象においては類似していると見えるが、その内実においては実にさまざまであると言わざるをえない。そのような中で「子どもネットワーク」という新しい試みが、現代という時代把握や、親や子のおかれている状況の分析などから得た理念には、今後の日本の保育政策を考える際に大いに参考になるものが含まれていると思えるのである。

三、子どもネットワークの内容

（一）経費について

「子どもネットワーク」運営のための財政面に関しては、（図2）にプロジェクト数とともに示されている。プロジェクト遂行にかかる費用は、原則として、州が40％、市町村が同じく40％を負担する。残りの20％が両親の負担である。

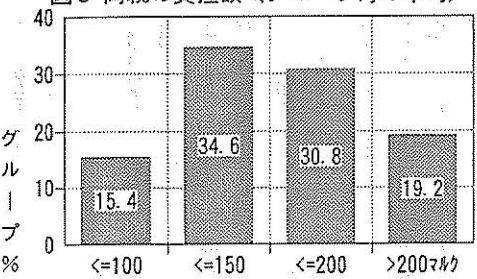
経営にかかる費用の内容を見ると、まず、保育の専門家への人件費がある。つまり保育者への給与であり、通常は保育士（Erzieherin／Erzieher），場合によっては社会教育士（Sozialpädagogin ／Sozialpädagoge）がそれにあたる。次に、交代で勤務した両親への報酬があり、1時間あたり最高12,5マルクである。加えて、場所の費用（保育施設賃貸

料)、諸雑費となる。バイエルン州は1998年度において総計800万マルクを拠出している。

両親の負担金の一ヶ月の平均額は158マルクである。プロジェクトの45.1%が負担金を均一額に設定している。その他のプロジェクトは何段階かの額を設定しているが、低い額の平均は124マルク、高い額の平均は226マルクである。個別の最低額は0マルク、最高額は400マルクである。図3に両親負担金をグラフで示す。[注6]

グループ内の両親間で負担額が異なる場合、その目安となる視点は、たいていの場合、きょうだい在園の有無(グループの61%が異なる負担額を設定している)、在園時間(同じく50%)、子どもの年齢(21.1%)、親の収入額(10.5%)である。両親が共に働いているかとか、居住地域がどこか、といったことはほとんどのグループで考慮されていない。負担額に対する両親の感想をみると、17.2%が自己負担がとても大きいと感じている。その関係を図4に示す。[注7]

図3 両親の負担額(グループ毎の平均)



(二) 開所時間

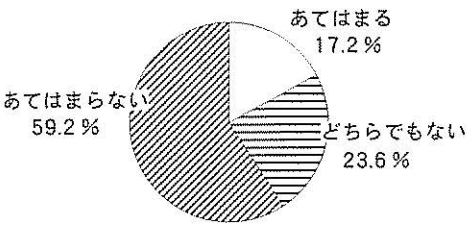
「子どもネットワーク」の施設開所時間は、最低基準として、1日4時間、週4日以上と決められているが、それぞれの施設によって柔軟に調整されている。

全体の平均では1日につき6.6時間であるが、プロジェクトによって大きな相違がある。27%の施設では登園、降園は完全に自由である。71%の施設では核となる在園すべき時間を定めており、それは平均3.5時間である。これは日本の一部の企業などで取り入れられているフレックスタイム制を想像してみればよいかもしれない。両親の86%は開所時間を家庭の日常の流れに合わせることをよいと考えている。

日本の保育園も登降園時間を比較的自由にしているところが多いが、それよりももっと徹底した形といえるかもしれない。国情の違いもありそうである。

部屋の広さは子ども一人あたり3.5平方メートル以上の空間が必要と最低基準が定められているが、ほとんどのプロジェクトにおいてそれを上回っている。

図4 両親へのアンケート:
「経済的負担がとてもある」と感ずるか?



(三) 保育方法

「子どもネットワーク」は州が音頭をとって行政主導で始まったわけであるが、それ以後、新しく「子どもネットワーク」を創設する主体はさまざまである。つまり、その理念に共鳴する人々が次々に新しいネットワークを作っていく。設立を企画する主体は、保育士、保育施設経営者とともに、両親であることも多い。一般に、保育士がイニシアティブをとって創設したものは、両親や経営者がイニシアティブをとって運営するプロジェクトよりも、両親の満足度が高いという調査結果が出ている。[注8] その理由として、両親がその園の保育への考え方を理解していることが就園の契約の際に中心になることや、保育士自身がはっきりとした保育方針を持っているという、その人間性への賛同の故ではないかと考えられる。

グループの40%においては、個々の家庭でこれまでになされてきた保育のやり方を話し合って、プロフェッショナルなやり方において、それをできるだけ継続していこうとする姿勢がみられている。つまり、保育の中心になるモティベーションは家族の考え方であると言える。そして、家庭生活との連携を考え、家庭生活を延長した雰囲気の中で行われているプロジェクトにおいて参加者の満足度が高い。そのような背景の故か、半数以上の両親は、ほかの諸施設におけるよりも「子どもネットワーク」において、我が子がより良く育成されると感じている。また、当然ながら、「子どもネットワーク」の立ち上げから関わって活動してきた両親の場合の満足度は高い。

形式や雰囲気などに家庭生活とのつながりを考えていることはあっても、「子どもネットワーク」は集団保育の場である。その保育の方法における思想的背景として一番多いのは、自由主義に基づく保育であるという調査結果が出ている。これはプロジェクト全体の62%を占める。つまり、子どもたちは自由に遊びや活動ができるよう配慮された環境の中で、それぞれの状況に応じた発達を遂げていく。これは日本の＜環境による保育＞の考え方と通じるものがあるといえよう。次いでモンテッソーリ方式とシュタイナー主義が2位、3位を占める。

両親に対する調査では、90%の両親が教育的方法に満足感を示しているが、このことは、大部分のネットワークにおいて、両親は十分に内容を吟味して子どもを就園させていたり、あるいは、プロジェクトの創設時から関わっていたりしていることを思えば、予想外の結果とは言えない。しかしながら、実際の運営は机上での準備段階とは異なる展開を見せることもあることに思いを致せば、大部分の両親が満足しているという結果は、この企画自体の大きな成功と言いうるのではないか。

これらは1993年から1996年まで、ニュールンベルクの社会文化研究所（Institut für soziale und kulturelle Arbeit, 通称ISKA）が調査研究して示した結

果である。両親も保育士も実際に体験した結果の感想として「自分たちの」クラスに高い満足度を表明していることの意義は大きい。

（四）両親の参加

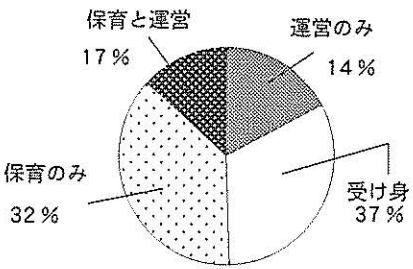
「子どもネットワーク」では多数の両親が運営や日常の保育活動に参加している。そのことがこのシステムの大きな特徴でもある。

両親はどのような課題に関わっているのかを見てみよう。まず、保育のあり方についての基本的概念の決定及び保育や教育の目的についての検討への参加があげられる。また、そのプロジェクトを立ち上げる際の課題、たとえば、場所探しや部屋の形態、室内の装飾といったことにも関わる。保育士、社会教育士などの教育の専門家以外の人がイニシアティブをとるプロジェクトでは、専門家をさがして雇用することにも関わることがある。ネットワークを立ち上げた後では、運営業務、たとえば、財政処理にも携わる。そして、中心となるのは、言うまでもなく、保育士などと共に子どもの世話をすることである。

どの程度保育や運営に参加するかは、それぞれの両親の自己責任で決定していく。クラスの一日の様子は場所や家族の状況によりフレキシブルに決められていくが、平均して両親の63％が週4.6時間参加している。

予想されることであるが、積極的に参加する両親ほど、両親参加の形態を肯定的にとらえている。両親がどのような形で「子どもネットワーク」に参加しているかを図5に示す。[註3]

図5 「子どもネットワーク」への両親の参加の仕方



両親が実際に参加活動を体験した結果、どのような有益なものを得たと感じているかを、アンケート結果から列挙してみよう。

1. 自分の子どもと密接に接触できる。（両親の55％が挙げている。以下同じ）
2. 家庭以外の場所での我が子のあり方を知った。あるいは、ここでは我が子が家庭とは異なる振る舞いをするのを見た。（52％）
3. ほかの両親との共同活動によって刺激を受けた。（50％）保育士などとの共同活動によって刺激を受けた。（76％）
4. 保育士などの保育の専門家が、保育活動の支柱であることを実感した。（61％）

などである。

加えて、保育士など保育の専門家との交流は、92％の両親がとても価値あるものだと考えている。

子どもを「子どもネットワーク」に入れている両親のうち、父親の97%、母親の57%が就業しているか、職業教育訓練中かである。一人で子育て中の親もおり、彼らのほとんどは、当然ながら、家事専業というわけではない。両親参加の主旨から言って、両親はそれぞれのできる範囲で運営や保育に参加するのだが、それにしても、就業と保育参加との両立には困難がありそうに思える。

その間の事情を見てみると、フルタイムで就業中の両親の約半数は、時間をやりくりして積極的に子どもの世話に関わっている。家事専業の母親と就業中の母親との間で参加する度合いに差が生ずることは、親同士の間に軋轢を生むのではないかという心配が考えられるのだが、今のところ、そのようなことに関する顕著な報告は見られないようである。

ドイツにおいても母親の就業率は近年増加傾向にある。平均してみると、母親の四分の三が就業中（パートタイムを含む）というクラスは全体の21%となる。

就業と保育を最初から両立させることを選択している両親ほど、父親と母親が交代するなど工夫して、多忙な中でも何らかのかたちで積極的に参加している傾向がある。自分たちの生活のあり方や、「子どもネットワーク」の理念などを意識的に選択決定し、参加のモティベーションがはっきりしている人ほど成果も上がる、と言えるであろう。

日本と異なり、一人で子育て中の親の割合は高い。0～5歳児の集うクラスの17%、それ以上の年齢児のクラスで13%という数字が出ている。

次に視点を変えて、保育士のほうでは両親参加をどのようにとらえているかを見ると、保育士の70%が協力関係をとても肯定的にとらえている。言うなれば保育のプロとアマが子どもの世話で密接に協力することは、プロである保育の専門家にとっても、新しい挑戦であり、挑んでみるべき課題であるとも言える。

保育士は、保育の専門家としてのみならず、家族への助言者として、また、摩擦の調停者としても育成されていく。従来の保育施設においては、子どもと保育士だけがいる保育室内の様子について、両親は断片的にしか把握することができず、そこには弊害も生じていた。それに対して、両親参加というシステムは、この密室に風穴を開けることになり、保育士のある種の「権力」を減少させることにもなる。

「子どもネットワーク」に就職する保育士は、主旨を理解している人が多いということもあるが、新しい保育形態を認め、両親と自らがお互いに影響しあって保育能力や責任感を高めあうことや、多面的な視野を獲得できることを積極的に評価している。

（五）年齢混合クラス

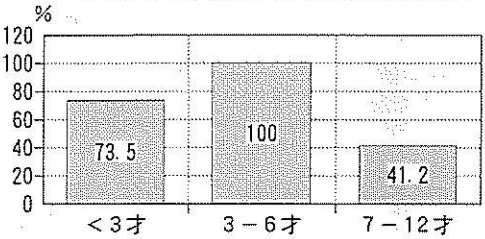
どのような年齢混合クラスが設けられているかを図6に示す。[註10]

保育士による年齢混合クラスへの肯定的評価を項目別に示す。

1. 子どもに社会的振る舞いを身に付けさせることが容易である。（保育士の91％の指摘。以下同じ）
2. 年少の子どもが年長の子どもから学ぶ。すなわち、きょうだい関係に似た人間関係が体験され、その関係が次々に継続する。入所時には末っ子の体験をした子どもが、その後、年上となって、弟、妹がいるかのような体験をしていく。（79％）
3. クラスでの争いが減少する。（53％）

などである。

図6 年令混合クラスの体験：どのような年令のクラスが設けられたか？



「子どもネットワーク」の年齢的な主力は2～5歳児であり、すべてのプロジェクトに年齢混合クラスが存在する。年齢混合という方法は、子どもが、年上に学び、年下に配慮して、変化していく過程こそが意味があると把握されるべきものであり、子どもが大家族的雰囲気を学ぶ場ともなりうる。

保育士の81％はこのシステムを肯定し、否定的に答えているのは4％にすぎない。ほぼすべての両親が我が子がさまざまな年齢の子どもたちと一緒にいることを良いととらえている。両親の肯定的な評価は、自分たちが両親参加システムによって保育の現場を見ることと連動して、両親全体の共通理解となっていったと言える。

（六）両親と保育士へのアンケート調査

ここで両親及び保育者がこのプロジェクトをどのようにとらえているかについて、アンケートを整理してみよう。

まず両親であるが、一言で言えば、満足度が非常に高い。プロジェクト開始一年後のアンケート結果を図7に示す。[注18]

これを子どもの在園期間一年半未満と、それ以上とに分けて示す。[注19]（図8）

これを見るとやはり初期の高揚感が目立つが、全体的に肯定的な考え方が多数であることは変わらない。

子どもへの効果についての考え方はどうか。

図7 両親の満足度（1）

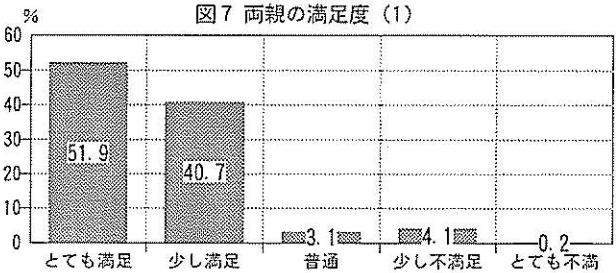


図8 両親の満足度（2）（経験期間による比較）

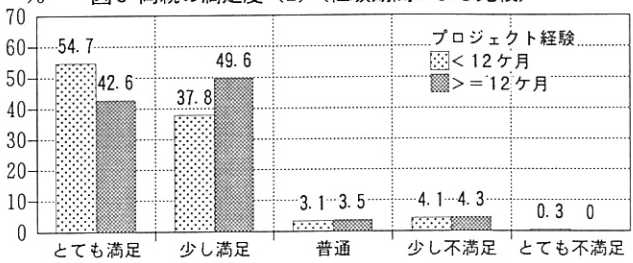


図9 自分の子どもにとっての「子どもネットワーク」の評価（

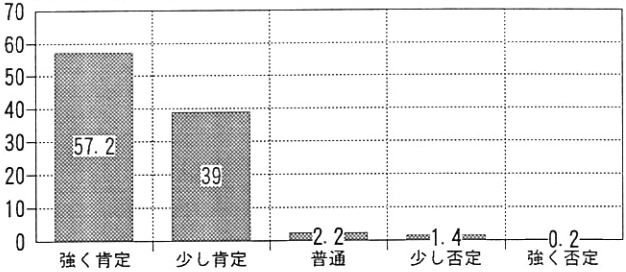
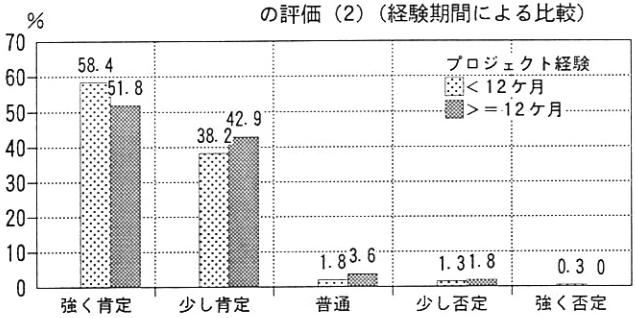


図9[注13]をみると、子どもの様子に対する満足度も高いことがわかる。家族のプロジェクト経験の期間別に比較してみた結果も同様である。[注14]（図10）

さて、子ども自身はどのように感じているのか、という大きな問題がある。両親の目を通してみた結果という制限があるものの、〝私の子どもは「子どもネットワーク」に喜んで通っている〟と感じている両親がほとんどである。これはプロジェクト体験期間に関係なく、いずれの調査においても90％を超える数字が出ている。[注15]

図10 自分の子どもにとっての「子どもネットワーク」の評価（2）（経験期間による比較）



では保育士たちの感想はどのようになっているであろうか。

プロジェクト開始後13ヶ月の時点での調査によると、保育士たちが「子どもネットワーク」を大変高率で肯定的にとらえていることがわかる。[注16]（図11）

この結果は時の経過と共にどのようになっていくであろうか。プロジェクト体験期間が12ヶ月未満と12ヶ月以上の保育士たちを比較調査した結果が図12である。[注17]

わずかに初期のほうに高揚感、期待感などが伺えるものの、有為の差と言い得るほどのものではなく、高い満足感と結論して差し支えないであろう。

それ以上に調査結果は、保育士たちがここでの仕事を楽しんでいることを表している。「子どもネットワーク」において、子どもたちと共にどのような体験をしたかとの問い

かけに対して、このクラス形式での子どもとの活動はとても楽しいと感じている保育士は90％以上、子どもたちはこのクラス形式で、良い、そして重要な体験をしていると答えた保育士は100％である。

四、子どもネットワークから家族ネットワークへ

「子どもネットワーク」はバイエルン州の労働・社会秩序・家族・女性・健康省がイニシアチブを取って、モデルプロジェクトとして発足したものであったが、その理念に対して多方面から深い賛同が寄せられ、1994年4月のモデルプロジェクト終了後、永続的なものとして設置された。ニュールンベルクの社会・文化研究所の調査結果も肯定的結果を明白に示している。

子どもにとってはきょうだい、友人が少なく、体験機会が減少し、親にとっては高情報化、高学歴化、核家族化が進む中で地域社会との関連が薄れ、施設保育の内容への不満も高まるという現代的状況に対して、「子どもネットワーク」のスタイルは明らかに一つの可能性を示していると言えるのではないか。

少人数の年齢混合クラスや、両親の積極的な保育への参加や協力の成功は、伝統的な保育施設（三歳未満児保育所、幼稚園、学童保育所など）にもそのスタイルが取り入れられ始めている。新しいスタイルをとにかく立ち上げて軌道に乗せた行政の手腕も注目に値する。

加えて、両親が具体的に協力活動を行うことは、家庭と家庭との結びつきを深めた。個々の家庭は日常の家庭保育の負担をお互いに軽減し、交流による新しい出会いは新しい友人の獲得につながった。「子どもネットワーク」は新しい「家族ネットワーク」を広める可能性を秘めているのである。

図11 保育士の満足度（1）

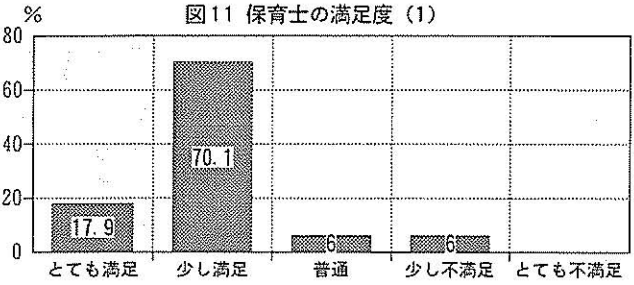
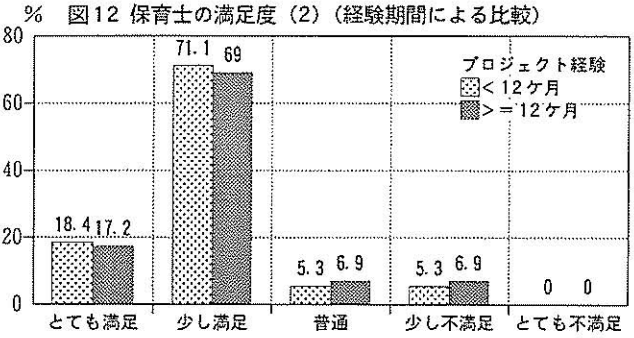


図12 保育士の満足度（2）（経験期間による比較）



なお、今回の「子どもネットワーク」に関する調査を行うに際して、ミュンヘンのバイエルン州労働・社会秩序・家庭・女性・健康省及びインゲボルク ベッカー＝テクスター担当官に資料送付などでご尽力いただいた。ここに感謝の意を表したい。

註

(1) バイエルン州の労働・社会秩序・家庭・女性・健康省では「子どもネットワーク」が示すのは児童通所施設における新たなる道 (Neue Wege in der Kindertagesbetreuung) であるという。

(2) ライン＝ラント＝プファルツ州の州都マインツの青少年・家族・女性省で保育行政を担当するホルガー氏の話であるが、両親から役所への苦情のうちで一番多いのは保育者に関するものであるという。

(3) Kindertagesbetreuung in Bayern-Zukunft für Kinder-erziehen・bilden・betreuen, 1998 Bayerishes Staatsministerium für Arbeit und Sozialordnung, Familie,Frauen und Gesundheit. S. 3

(4) Netz für Kinder-Neue Wege in der Kinder-tadesbetreuung; 1997, Institut für soziale und kulturelle Arbeit, Nürnberg, Gunter Kraus, Sigrid Zauter S. 91

(5) Netz für Kinder-Das Konzept, Ergebnisse der wissenschaftlichen Begleitung, Projektentwicklung; 1998 Bayerisches Staatsministerium für Arbeit und Sozialordnung, Familie, Frauen und Gesundheit

(6) Netz für Kinder-Neue Wege in der Kinder-tadesbetreuung; 1997, Institut für soziale und kulturelle Arbeit, Nürnberg, Gunter Kraus, Sigrid Zauter S. 119

(7) ibid., S. 119

(8) ibid., S. 6

(9) Netz für Kinder-Das Konzept, Ergebnisse der wissenschaftlichen Begleitung, Projektentwicklung; 1998 Bayerisches Staatsministerium für Arbeit und Sozialordnung, Familie, Frauen und Gesundheit

(10) ibid.,

(11) Netz für Kinder-Neue Wege in der Kinder-tadesbetreuung; 1997, Institut für soziale und kulturelle Arbeit, Nürmberg, Gunter Kraus, Sigrid Zauter S. 11

(12) ibid., S. 11

(13) ibid., S. 12

(14) ibid., S. 12

(15) ibid., S. 12

(16) ibid., S. 15

(17) ibid., S. 15